

食部を例に原本玉篇の典拠情報整理について

李 媛¹

要 旨

原本『玉篇』は中国で早く散逸し、日本に伝存する残巻七巻のみが現存する。『篆隸万象名義』、宋本『玉篇』では典拠情報が多く省略されるため、残巻に保存された典拠の整理は原本の編纂方針、注釈体系の復元に不可欠である。本稿は巻九「食部」(144項目)を対象に、典拠書名(39種・延べ328回)と注釈家等人名(13種・延べ97回)を整理・分析し、部首単位での引用分布と頻度を示す。さらに、典拠一覧を<teiHeader>に集約し、本文からID参照で記述するTEIモデルを提示し、「食」項目を例に引用、注釈、案語、異読を階層的に表現できることを示す。今後は他部首へ拡張し、残巻全体の体系的整理と比較計量的分析を進める。

1. まえがき

原本『玉篇』は中国において早くに散逸したが、清末以降、日本に伝存していた原本『玉篇』残巻の存在が中国学界に知られるようになってから、同書に関する研究は日中の学界において、ともに大きく進展してきた。日本では、原本『玉篇』の受容や後世の辞書編纂への影響を中心とする研究が展開されてきたのに対し、中国では、原本『玉篇』残巻を中心に、全文校勘や字形、語義の検討、引書の考証など、多方面にわたる研究成果が蓄積されつつある。

こうした研究のなかで注目されるのが、原本『玉篇』に含まれていた典拠情報である。『篆隸万象名義』および宋本『玉篇』は、いずれも原本『玉篇』を基礎としながら成立した字書であるが、そこでは原本に見られたと考えられる典拠情報の多くが省略されている。そのため、原本『玉篇』残巻に保存された典拠情報は、原本の編纂方針や注釈体系を考察するうえで、きわめて重要な資料的価値を有している。

これまで引書に関しては、特定の典拠や個別文献を対象とした詳細な論考が数多く発表されてきた。一方で、原本『玉篇』残巻全体、あるいは特定の部首を対象として、引用文献の種類や分布、文献ごとの出現頻度などを網羅的かつ計量的に整理した研究は、いまだ十分に行われているとは言い難い。本稿は、原本『玉篇』残巻巻九の「食部」を対象とし、そこに見られる典拠情報の実態を整理、分析することを目的とする。あわせて、こうした典拠情報をTEIによってどのように記述・構造化しうるかを検討し、その方法的可能性を提示する。なお、本稿で行う典拠情報の整理は、『篆隸万象名義』や宋本『玉篇』との比較を視野に入れたものであり、失われた原本『玉篇』再構に向けた基礎的作業の一環として位置づけられる。

¹ 京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター

2. 先行研究

原本『玉篇』をめぐる先行研究は数多く存在するが、ここでは本稿の趣旨に直接関わる全文校勘および引書研究に着目し、その内容を概観する。

2.1 全文校勘研究

原本『玉篇』残巻に関する全文校勘研究は、これまで主として胡吉宣、臧克和、姚永銘らによって体系的に進められてきた。

胡吉宣『玉篇校釈』1989は、『大広益会玉篇』を基準に原本『玉篇』残巻を取り込み、関連典籍との校勘および佚文考証を行った基礎的業績である。臧克和『中古漢字流變』2008は、『説文解字』や『篆隸万象名義』などを含む諸資料を総合的に比較し、逐条的な校訂と注釈を通じて六朝から唐宋に至る楷字発展の様相を明らかにした。姚永銘2023『原本玉篇残巻校証』は、中日双方の関連文献を網羅的に検討し、いわゆる「語境還元法」に基づいて形・音・義の三面から内容復原を試みたものであり、佚文整理の面でも重要な成果を示している。

また、呂浩『〈玉篇〉文献考述』2018は、『玉篇』に関わる文献学的研究を総括した専著であり、附録として原本『玉篇』残巻の校点本や逸文集録を収録するなど、研究基盤の整備に大きく寄与している。

2.2 引書について

原本『玉篇』は、引用典籍の種類がきわめて豊富であり、その引書は高い文献学的価値を有することから、多くの先行研究が蓄積されてきた。

胡吉宣『《玉篇》引書考異』1982は、原本『玉篇』における引書の全体像を体系的に整理し、『周易』『毛詩』『尚書』『国語』『左伝』など四十種に及ぶ典籍を対象として、文字異同や出典関係、版本差異を詳細に考察した代表的研究である。

その後も、特定の典籍に着目した個別研究が数多く発表されている。朱葆華「原本《玉篇》引《説文》考略(一)」1998は、原本『玉篇』残巻に見られる『説文』引用を諸本と比較し、その異同を整理した。蘇芑「試論《原本玉篇残巻》引書材料的文献学価値：以引《左氏伝》為例」2006は、『左氏伝』引用例を通じて、原本『玉篇』残巻の文献学的価値を論じた。徐前師2007「唐写本《玉篇》中的《字書》」は、唐写本『玉篇』に見られる「字書」の性格を検討し、その出所について考証を行っている。郭萬青「《原本玉篇残巻》引《国語》例辨正」2009は、『国語』引用例を整理・校正し、用字や注釈の継承関係を明らかにした。

さらに、蘇芑「原本《玉篇》引《史記》及関連古注材料考論：裴駰《史記集解》南朝梁代傳本之發現」2011は、『史記』引用と古注との関係を検討し、その資料的価値を指摘した。陳錦春・蓋翠傑「原本『玉篇』引『詩』考論」2014は、『詩経』引用の特徴と文献学的意義を論じている。蘇芑「《玉篇》残巻征引『儀礼』考」2017および胡智雄「原本《玉篇》残巻引《礼記》管窺」2017は、それぞれ『儀礼』『礼記』の引用例を通じて、南朝期経伝テキスト

トの様相を考察した。蘇芑「南朝蕭梁時期《春秋公羊傳》經注文本探微：以原本《玉篇》引書爲例」2018は、『公羊伝』引用を素材として、その伝本系統を検討している。李慶彬「原本《玉篇》引《尚書》考論」2019 および劉杰陽「原本《玉篇》引《尚書》傳本性質試析」2021は、『尚書』引用の異文や伝本的性格を分析した研究である。劉新楠「原本《玉篇》引書字詞異文價值拳隅」2021は、複数の典籍引用に見られる字詞異文の価値を指摘している。

しかしながら、引書研究の多くは個別文献に焦点を当てたものであり、原本『玉篇』残巻全体、あるいは特定の巻や部首を対象として、引用文献の種類や分布、文献ごとの出現頻度などを網羅的、特に計量的に整理した研究は、いまだ十分に行われていない。

本稿は、この点に着目し、原本『玉篇』残巻巻九「食部」を例として、その典拠情報の実態を整理分析するとともに、TEI による記述を試みるものである。

3. 原本玉篇残巻

3.1 残巻とそのデータベース

原本『玉篇』は中国で早く散逸し日本では約八分の一の残巻7巻が伝存している。原本『玉篇』残巻とその所蔵状況について、岡井（1933）と池田（2014）とを参照すると、詳細は次の通りである。

表1 原本玉篇残巻とその所蔵状況

| 巻 | 八 | 九 | | | 十八 | 十九 | 二十二 | 二十四 | 二十七 | |
|----------|---------------------|---------------------------------|-----------------------------------|-------------------|--|---|-----------|-----------|-------------------|-------------------|
| 収録 部首 | 心部 | 言部～ 冊部 | 冊部～ 欠部 | 欠部～ 牽部 | 放部～ 方部 | 水部 | 山部～ 宀部 | 魚部 | 糸部 前半 | 糸部～ 索部 |
| 所蔵 機関 | 大東 急記 念文 庫 | 早稲田 大学図 書館蔵 * 語部 不明 | 京都国立 博物館蔵 (福井崇 蘭館旧 蔵) | 早稲田 大学図 書館蔵 | 藤田家 (東大寺 尊勝院旧 蔵) * 車 部の「輶 ～輶」・ 「輶～ 輶」不明 | 藤田家 (東大寺 尊勝院旧 蔵) * 「冷～ 湛」安田 文庫旧 蔵、現蔵 未詳 | 神宮文庫 蔵 | 大福光 寺蔵 | 高山寺 蔵(糸 ～縵) | 石山寺 蔵(經 ～縵) |

筆者が所属する北海道大学文学研究院言語科学講座池田証壽研究室では、平安時代漢字字書を対象とする「平安時代漢字字書総合データベース (HDIC)」プロジェクトを推進している。プロジェクトの一環として、原本『玉篇』残巻の内容を収録したサブデータベースである「原本『玉篇』残巻データベース」が構築された。データベースの構築にあたっては、東方文化学院『東方文化叢書第六』所収の複製本を基礎資料とし、あわせて既刊の諸複製本およびウェブ上で公開されている写真画像を参照した。複製本および写真画像が確認できない箇所については、翻刻本文が存在する場合に限り、それを参照して補った²。本研究で用いるテキストは、HDIC によるものである。

² 池田証壽「平安時代漢字字書総合データベース：現状と課題 2014 夏」(『漢デジ 2014—デジタル翻刻の未来』、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター、2014)、pp.3-43.

3.2 玉篇残巻の巻・部首・字数

原本『玉篇』の残存する7巻、63部首3について、データベースに基づき調査し、その存欠状況及び分巻の詳細を、次のようにまとめた(表2)。

表2 原本『玉篇』残巻の存欠の詳細

| | | | | | | | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----------|-----|------|
| 玉篇分巻 | 八 | | | | 九 | | | | | |
| 所属部首 | 心部 | | | | 言部 | 誥部 | 日部 | 乃部 | 彡部 | |
| 部首番号 | 88 | | | | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | |
| 残存状況 | 首尾欠 | | | | 首欠 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | |
| 残存字数 | 7 | | | | 312 | 6 | 11 | 5 | 4 | |
| 玉篇分巻 | 九 | | | | | | | | | |
| 所属部首 | 可部 | 兮部 | 号部 | 于部 | 云部 | 音部 | 告部 | 口部 | 𠂔部 | 品部 |
| 部首番号 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 | 101 | 102 | 103 | 104 | 105 |
| 残存状況 | 全存 | 全存 | 首欠 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 |
| 残存字数 | 4 | 6 | 1 | 6 | 2 | 16 | 2 | 1 | 13 | 4 |
| 玉篇分巻 | 九 | | | | | | | | | |
| 所属部首 | 桌部 | 龠部 | 冊部 | 𠂔部 | 只部 | 肉部 | 欠部 | 食部 | 甘部 | 旨部 |
| 部首番号 | 106 | 107 | 108 | 109 | 110 | 111 | 112 | 113 | 114 | 115 |
| 残存状況 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 中欠 | 全存 | 中欠 | 中欠 |
| 残存字数 | 3 | 9 | 4 | 9 | 2 | 6 | 101 | 144 | 10 | 3 |
| 玉篇分巻 | 九 | | | | 十八 | | | | | |
| 所属部首 | 次部 | 率部 | 放部 | 𠂔部 | 左部 | 工部 | 卜部 | 兆部 | 用部 | 爻部 |
| 部首番号 | 116 | 117 | 271 | 272 | 273 | 274 | 277 | 278 | 279 | 280 |
| 残存状況 | 中尾欠 | 中尾欠 | 全存 | 全存 | 全存 | 尾欠 | 首欠 | 全存 | 全存 | 全存 |
| 残存字数 | 5 | 4 | 3 | 12 | 3 | 3 | 8 | 2 | 7 | 3 |
| 玉篇分巻 | 十八 | | | | 十九 | 二十二 | | | | |
| 所属部首 | 𠂔部 | 車部 | 舟部 | 方部 | 水部 | 山部 | 屮部 | 嵬部 | 尸部 | 广部 |
| 部首番号 | 281 | 282 | 283 | 284 | 285 | 343 | 344 | 345 | 346 | 347 |
| 残存状況 | 全存 | 中欠 | 中欠 | 全存 | 中尾欠 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | ほぼ全存 |
| 残存字数 | 4 | 102 | 28 | 4 | 145 | 143 | 2 | 2 | 10 | 96 |
| 玉篇分巻 | 二十二 | | | | | | | | | 二十四 |
| 所属部首 | 厂部 | 高部 | 危部 | 石部 | 磬部 | 白部 | 阜部 | 𠂔部 | 宀部 | 魚部 |
| 部首番号 | 348 | 349 | 350 | 351 | 352 | 353 | 354 | 355 | 356 | 397 |
| 残存状況 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 | 全存 |
| 残存字数 | 40 | 7 | 4 | 152 | 8 | 2 | 139 | 5 | 4 | 26 |
| 玉篇分巻 | 二十七 | | | | | | | | | |
| 所属部首 | 糸部 | | | | | | | | | |
| 部首番号 | 425 | | | | | | | | | |
| 残存状況 | 全存 | 糸部 | 素部 | 絲部 | 𦉳部 | 率部 | 索部 | | | |
| 残存字数 | 392 | 426 | 427 | 428 | 429 | 430 | 431 | 計 2,087 字 | | |

4. 食部の典拠情報の調査

原本『玉篇』残巻における典拠情報は、主として文献の書名、あるいは注釈家などの人名によって示されている。本稿では、原本『玉篇』残巻の巻九に含まれる「食部」を対象として典拠情報の整理、分析を行い、その全体的な状況を表3に示す。

食部は、原本『玉篇』残巻のなかでも全体が保存されている部首であり、総項目数は144項目である。食部に見られる文献書名による典拠は計39種、出現回数は延べ328回に及

³ 李媛「篆隸万象名義の本文データベースの構築 —玉篇残巻対応部分を中心にして」(『国語国文研究』146、2015) pp.80-65.

ぶ。最も多く引用されている文献は『説文解字』で64回を数え、これに次いで『字書』『方言』『廣雅』といった小学書類がいずれも20回以上出現している。

また、10回以上出現する文献としては、経典類では『毛詩』『礼記』『周礼』『左氏傳』が挙げられ、小学書類では『埤蒼』『爾雅』『蒼頡篇』『聲類』が該当する。2回以上10回未満の出現数を示す文献には、『尚書』『論語』『楚辞』『国語』『韓詩』『公羊傳』『儀礼』『穀梁傳』『周易』『漢書』『积名』『周書』『大戴礼』などが含まれる。一方、出現回数が1回にとどまる文献としては、『世本』『史記』『淮南』『墨子』『孝経』『尚書大傳』『堯』、范甯『集解』『山海経』『莊子』『廣倉』『白虎通』などが確認される。

これに対して、注釈家等の人名による典拠は計13種、出現回数は延べ97回である。最も多く出現するのは鄭玄で27回、次いで郭璞が14回であり、杜預、孔安國、何休、王逸も複数回確認される。1回のみ出現する人名としては、鄭衆、馬融、劉熙、賈逵、孔子が挙げられる。なお、「野王案」は編纂者である顧野王による案語であり、性質上は一般の注釈家とは異なるが、人名として明示されているため、本稿では便宜的に注釈家と同列に計上した。

注釈家の出現状況を見ると、例えば『尚書』には孔安國注、『周礼』および『礼記』には鄭玄注、『左氏傳』には杜預注が付されるなど、原典と注釈家の注記が一体となって採録されている例が多いことが確認できる。

表3 「食部」における典拠書名(左)・典拠人名(右)および出現数

| 典拠書名 | 出現数 | 典拠書名 | 出現数 | 典拠書名 | 出現数 | 典拠人名 | 出現数 |
|-------|-----|-------|-----|--------|-----|------|-----|
| 《説文》 | 64 | 《尚書》 | 7 | 《呂氏春秋》 | 2 | 野王案 | 28 |
| 《字書》 | 26 | 《論語》 | 6 | 《世本》 | 1 | 鄭玄 | 27 |
| 《方言》 | 26 | 《楚辞》 | 6 | 《史記》 | 1 | 郭璞 | 14 |
| 《廣雅》 | 25 | 《国語》 | 5 | 《淮南》 | 1 | 杜預 | 8 |
| 《毛詩》 | 19 | 《韓詩》 | 5 | 《墨子》 | 1 | 孔安國 | 6 |
| 《礼記》 | 16 | 《公羊傳》 | 5 | 《孝経》 | 1 | 何休 | 5 |
| 《埤蒼》 | 15 | 《儀礼》 | 4 | 《尚書大傳》 | 1 | 王逸 | 3 |
| 《周礼》 | 14 | 《穀梁傳》 | 3 | 《堯》 | 1 | 王弼 | 1 |
| 《爾雅》 | 13 | 《周易》 | 2 | 范甯《集解》 | 1 | 鄭衆 | 1 |
| 《蒼頡篇》 | 13 | 《漢書》 | 2 | 《山海経》 | 1 | 馬融 | 1 |
| 《左氏傳》 | 12 | 《积名》 | 2 | 《莊子》 | 1 | 劉熙 | 1 |
| 《聲類》 | 11 | 《周書》 | 2 | 《廣倉》 | 1 | 賈逵 | 1 |
| 《傳》 | 9 | 《大戴礼》 | 2 | 《白虎通》 | 1 | 孔子 | 1 |

5. TEIによる食部の典拠情報の記述

5.1 <teiHeader>における典拠情報の整備

TEIによる記述において、典拠情報を<teiHeader>内に整理しておくことにより、本文<body>における各項目の記述から、IDを用いて一貫した参照を行うことが可能となる。ここでは、前節で整理した原本『玉篇』残巻の巻九「食部」の典拠情報を、文献書名および注釈家等の人名に分けて<teiHeader>に集約した。

具体的には、<sourceDesc>内に文献書名の一覧を示す<listBibl>を設け、各典拠文献に

対して固有の `xml:id` を付与した `<bibl>` 要素として登録した。これにより、本文中では `<ref>` 要素等を用いて、対応する典拠文献を一意に参照することが可能となる。また、范甯『集解』のように、著者名と書名を併せて示す必要のある資料については、`<author>` 要素と `<title>` 要素を組み合わせて記述した。

同様に、注釈家等の人名については `<listPerson>` を用いて整理し、各人物に `xml:id` を付した `<person>` 要素として登録した。ここには、鄭玄、郭璞、杜預など、原本『玉篇』残巻において引用頻度の高い注釈家に加え、編纂者顧野王自身による案語である「野王案」も含めている。「野王案」は注釈家とは性格を異にするが、本文中では人名として明示されるため、本稿では便宜的に同一の枠組みで扱うこととした。

以上のように、典拠文献および典拠人名を `<teiHeader>` においてあらかじめ定義することにより、本文 `<body>` における記述は、典拠情報を直接記述するのではなく、対応する ID を参照する形で簡潔かつ統一的行うことができる。この方法は、典拠情報の一貫性を確保するとともに、将来的な修正や拡張を容易にする点でも有効である。

```
<teiHeader>
  <fileDesc>
    <titleStmt>
      <title>原本玉篇残巻 卷九 食部 典拠リスト</title>
    </titleStmt>
    <publicationStmt>
      <p>原本玉篇内部参照用リスト</p>
    </publicationStmt>
    <sourceDesc>
      <listBibl xml:id="refBooks">
        <head>典拠書名一覧</head>
        <bibl xml:id="Shuowen"><title>説文</title></bibl>
        <bibl xml:id="Zishu"><title>字書</title></bibl>
        <bibl xml:id="Fangyan"><title>方言</title></bibl>
        <bibl xml:id="Guangya"><title>廣雅</title></bibl>
        <bibl xml:id="Maoshi"><title>毛詩</title></bibl>
        <bibl xml:id="Liji"><title>礼記</title></bibl>
        <bibl xml:id="Picang"><title>埤蒼</title></bibl>
        <bibl xml:id="Zhouli"><title>周礼</title></bibl>
        <bibl xml:id="Erya"><title>爾雅</title></bibl>
        <bibl xml:id="Cangjiepian"><title>蒼頡篇</title></bibl>
        <bibl xml:id="Zuoshizhuan"><title>左氏傳</title></bibl>
        <bibl xml:id="Shenglei"><title>聲類</title></bibl>
        <bibl xml:id="Zhuan"><title>傳</title></bibl>
        <bibl xml:id="Shangshu"><title>尚書</title></bibl>
        <bibl xml:id="Lunyu"><title>論語</title></bibl>
      </listBibl>
    </sourceDesc>
  </fileDesc>
</teiHeader>
```

<bibl xml:id="Chuci"><title>楚辭</title></bibl>
<bibl xml:id="Guoyu"><title>國語</title></bibl>
<bibl xml:id="Hanshi"><title>韓詩</title></bibl>
<bibl xml:id="Gongyangzhuan"><title>公羊傳</title></bibl>
<bibl xml:id="Yili"><title>儀禮</title></bibl>
<bibl xml:id="Guliangzhuan"><title>穀梁傳</title></bibl>
<bibl xml:id="Zhouyi"><title>周易</title></bibl>
<bibl xml:id="Hanshu"><title>漢書</title></bibl>
<bibl xml:id="Shiming"><title>積名</title></bibl>
<bibl xml:id="Zhoushu"><title>周書</title></bibl>
<bibl xml:id="Dadaili"><title>大戴禮</title></bibl>
<bibl xml:id="LvshiChunqiu"><title>呂氏春秋</title></bibl>
<bibl xml:id="Shiben"><title>世本</title></bibl>
<bibl xml:id="Shiji"><title>史記</title></bibl>
<bibl xml:id="Huainan"><title>淮南</title></bibl>
<bibl xml:id="Mozi"><title>墨子</title></bibl>
<bibl xml:id="Xiaojing"><title>孝經</title></bibl>
<bibl xml:id="ShangshuDazhuan"><title>尚書大傳</title></bibl>
<bibl xml:id="Jian"><title>箋</title></bibl>
<bibl xml:id="FanningJiejie"><author>范甯</author><title>集解</title></bibl>
<bibl xml:id="Shanhaijing"><title>山海經</title></bibl>
<bibl xml:id="Zhuangzi"><title>莊子</title></bibl>
<bibl xml:id="Guangcang"><title>廣倉</title></bibl>
<bibl xml:id="Baihutong"><title>白虎通</title></bibl>
</listBibl>

<listPerson xml:id="refPersons">
<head>典拋人名一覽</head>
<person xml:id="GuYeWang" type="editor_commentary">
<persName>野王案</persName>
<note>編者（顧野王）による自身の見解・注記</note>
</person>
<person xml:id="ZhengXuan"><persName>鄭玄</persName></person>
<person xml:id="GuoPu"><persName>郭璞</persName></person>
<person xml:id="DuYu"><persName>杜預</persName></person>
<person xml:id="KongAnGuo"><persName>孔安國</persName></person>
<person xml:id="HeXiu"><persName>何焯</persName></person>
<person xml:id="WangYi"><persName>王逸</persName></person>
<person xml:id="WangBi"><persName>王弼</persName></person>
<person xml:id="ZhengZhong"><persName>鄭衆</persName></person>
<person xml:id="MaRong"><persName>馬融</persName></person>
<person xml:id="LiuXi"><persName>劉熙</persName></person>
<person xml:id="JiaKui"><persName>賈逵</persName></person>

```
<person xml:id="Confucius"><persName>孔子</persName></person>
</listPerson>
</sourceDesc>
</fileDesc>
</teiHeader>
```

5.2 「食」項目の TEI 記述例

前節で整備した典拠リストを利用し、ここでは原本『玉篇』残巻卷九「食部」に属する「食」字項目を例として、TEI による具体的な記述方法を示す。

この「食」の項目では、まず <entry> 要素を用いて一字項目全体を定義し、その内部に字形・反切を示す <form>、および語義・用例ごとに区分した複数の <sense> 要素を配置した。反切は <pron> 要素によって記述し、原文に見える「是力反」をそのまま保持している。

各語義に付随する引文は <cit type="quotation"> 要素として記述し、引用元の文献書名については <bibl> 内の <title> 要素から、ref 属性によって <teiHeader> に定義した典拠書名リストを参照する形とした。これにより、本文中では文献名の表記揺れを回避しつつ、典拠情報を一元的に管理することが可能となる。また、孔安國、鄭玄、杜預らによる注釈は <cit type="commentary"> として区別し、<author> 要素に ref 属性を付与することで、典拠人名リストとの対応関係を明示した。

さらに、顧野王自身による案語については、一般の注釈家による注釈と区別するため、<note type="editor"> 要素を用いて記述し、resp 属性によって編纂者である顧野王を明示した。このように記述上の区別を設けることで、原典引用、注釈、編纂者自身の見解を、構造的に判別可能な形で表現している。

語義の区分については、原文の叙述構成に即して複数の <sense> 要素に分割し、それぞれに対応する引文・注釈を配置した。また、異読に関しては、<entry type="subentry"> を用いて主項目から独立させ、「又音慈吏反」に基づく用例群を別立てで記述した。この処理により、同一字形における音読差および意味展開を、TEI 上で明確に区別することが可能となる。

以上のように、本稿での TEI 記述では、原本『玉篇』残巻に見られる複雑な引用構造：すなわち、複数文献からの引用、注釈家による解釈、編纂者自身の案語、さらには異音、異義の併存を、階層的かつ再利用可能な形で表現することを目指した。この方法は、食部に限らず、ほかの部首、巻への展開や、典拠情報の集計、比較分析を行う際にも有効であると考えられる。

「食」項目の原文（句読等は筆者による）

食，是力反。《尚書》：“食哉惟時。”“鴻範八政，一曰食。”孔安國曰：“勤農業也。”野王案：此食謂五穀可食，以護人命也。《論語》：“足食足兵”是也。凡口所嚼唯者皆曰食也。《尚書》：“唯辟玉食”、《左氏傳》：“肉食者謀之”是也。又曰：“乃卜，瀆水

東，灑水西，惟洛食。”孔安國曰：“卜必先墨畫龜，然後灼之，兆從食墨也。”又曰：“朕弗食言。”孔安國曰：“盡其言，偽不實也。”《周禮》：“與其食。”鄭玄曰：“行道曰糧，糧謂糒也；止居曰食，食謂米也。”《世本》：“黃帝作大火食。”《左氏傳》：“不可食已。”杜預曰：“食，消也。”又曰：“切以食民。”杜預曰：“食，養也。”《禮記》：“則擇不食之地。”鄭玄曰：“不食謂不耕墾也。”《爾雅》：“食，偽也。”《史記》：“博之貴鵠，得便則食。”野王案：梟相吞并，如人食也。又音慈吏反。《周禮》：“膳夫掌王之飲食。”鄭玄曰：“食，飯也。”野王案：飯為食也。《禮記》：“食居人之左”、“我則食之”並是也。以飲食設供於人亦曰食，為飭字也。（原本玉篇殘卷 卷9 食部）

```
<entry xml:id="Y09203229-1">
  <form type="lemma">
    <orth>食</orth>
    <pron>是力反</pron>
  </form>

  <sense n="1">
    <cit type="quotation">
      <bibl><title ref="#Shangshu">《尚書》</title></bibl>
      <quote>「食哉惟時。」「鴻範八政，一曰食。」</quote>
    </cit>
    <cit type="commentary">
      <bibl><author ref="#KongAnGuo">孔安國</author>曰</bibl>
      <quote>「勤農業也。」</quote>
    </cit>
    <note type="editor" resp="#GuYeWang">
      野王案：此食謂五穀可食，以護人命也。
    </note>
    <cit type="quotation">
      <bibl><title ref="#Lunyu">《論語》</title></bibl>
      <quote>「足食足兵」</quote>是也。
    </cit>
  </sense>

  <sense n="2">
    <def>凡口所嚼唯者皆曰食也。</def>
    <cit type="quotation">
      <bibl><title ref="#Shangshu">《尚書》</title></bibl>
      <quote>「唯辟玉食」</quote>
    </cit>
    <cit type="quotation">
      <bibl><title ref="#Zuoshizhuan">《左氏傳》</title></bibl>
      <quote>「肉食者謀之」</quote>是也。
    </cit>
  </sense>

  <sense n="3">
```

<cit type="quotation">
 <bibl><title ref="#Shangshu">《又》</title>曰</bibl>
 <quote>「乃卜，灋水東，灋水西，惟洛食。」</quote>
</cit>
<cit type="commentary">
 <bibl><author ref="#KongAnGuo">孔安國</author>曰</bibl>
 <quote>「卜必先墨畫龜，然後灼之，兆從食墨也。」</quote>
</cit>
<cit type="quotation">
 <bibl><title ref="#Shangshu">又</title>曰</bibl>
 <quote>「朕弗食言。」</quote>
</cit>
<cit type="commentary">
 <bibl><author ref="#KongAnGuo">孔安國</author>曰</bibl>
 <quote>「盡其言，偽不實也。」</quote>
</cit>
</sense>

<sense n="4">
 <cit type="quotation">
 <bibl><title ref="#Zhouli">《周禮》</title></bibl>
 <quote>「與其食。」</quote>
 </cit>
 <cit type="commentary">
 <bibl><author ref="#ZhengXuan">鄭玄</author>曰</bibl>
 <quote>「行道曰糧，糧謂糲也；止居曰食，食謂米也。」</quote>
 </cit>
 <cit type="quotation">
 <bibl><title ref="#Shiben">《世本》</title></bibl>
 <quote>「黃帝作大火食。」</quote>
 </cit>
 <cit type="quotation">
 <bibl><title ref="#Zuoshizhuan">《左氏傳》</title></bibl>
 <quote>「不可食已。」</quote>
 </cit>
 <cit type="commentary">
 <bibl><author ref="#DuYu">杜預</author>曰</bibl>
 <quote>「食，消也。」</quote>
 </cit>
 <cit type="quotation">
 <bibl><title ref="#Zuoshizhuan">又</title>曰</bibl>
 <quote>「切以食民。」</quote>
 </cit>
 <cit type="commentary">
 <bibl><author ref="#DuYu">杜預</author>曰</bibl>
 <quote>「食，養也。」</quote>
 </cit>
<cit type="quotation">

<bibl><title ref="#Liji">《礼記》</title></bibl>
 <quote>「則擇不食之地。」</quote>
 </cit>
 <cit type="commentary">
 <bibl><author ref="#ZhengXuan">鄭玄</author>曰</bibl>
 <quote>「不食謂不耕墾也。」</quote>
 </cit>
 <cit type="quotation">
 <bibl><title ref="#Erya">《爾雅》</title></bibl>
 <quote>「食，偽也。」</quote>
 </cit>
 <cit type="quotation">
 <bibl><title ref="#Shiji">《史記》</title></bibl>
 <quote>「博之貴鷄，得便則食。」</quote>
 </cit>
 <note type="editor" resp="#GuYeWang">
 野王案：梟相吞并，如人食也。
 </note>
 </sense>
 <entry type="subentry">
 <form type="variant">
 <pron>又音慈吏反</pron>
 </form>
 <sense n="5">
 <cit type="quotation">
 <bibl><title ref="#Zhouli">《周礼》</title></bibl>
 <quote>「膳夫掌王之飲食。」</quote>
 </cit>
 <cit type="commentary">
 <bibl><author ref="#ZhengXuan">鄭玄</author>曰</bibl>
 <quote>「食，飯也。」</quote>
 </cit>
 <note type="editor" resp="#GuYeWang">
 野王案：飯為食也。
 </note>
 <cit type="quotation">
 <bibl><title ref="#Liji">《礼記》</title></bibl>
 <quote>「食居人之左」、「我則食之」</quote>並是也。
 </cit>
 <def>以飲食設供於人亦曰食，為飭字也。</def>
 </sense>
 </entry>
 </entry>

6. まとめ

本稿は、原本『玉篇』残巻の巻九に属する「食部」（全 144 項目）を対象として、「食部」

に見られる典拠情報の整理を行い、あわせて TEI による記述方法を試みたものである。文献書名および注釈家等の人名を体系的に抽出、整理し、これらを <teiHeader> に集約したうえで、本文 <body> において ID 参照を用いた記述を行うことにより、原本『玉篇』残巻における複雑な引用構造を構造的に表現しうることを示した。

食部は、原本『玉篇』残巻のなかでも全体が保存されている部首であり、典拠文献の種類や注釈家の分布を比較的明瞭に把握できる点で、用例研究として適した対象である。ただし、部首の性質や収録内容の影響により、典拠文献の出現には一定の偏りが生じていることにも留意する必要がある。本稿で示した方法をほかの部首に適用することにより、原本『玉篇』残巻7巻に含まれる計63部首の典拠情報を網羅的に整理することが可能となり、典拠文献の分布や引用傾向を、巻別、部首別の単位で明らかにすることができると考えられる。

今後、ほかの部首への展開を通じて原本『玉篇』残巻全体の典拠情報を体系的に整理するとともに、TEI に基づく記述を基礎データとして、原本『玉篇』再構に資する比較計量的分析を進めることが課題となる。

参考文献

- 池田証壽「平安時代漢字字書総合データベース：現状と課題 2014 夏」『漢デジ 2014—デジタル翻刻の未来』、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター 2014.
- 陳錦春、蓋翠傑「原本『玉篇』引『詩』考論」『図書館雑誌』上海図書館 2014 (33-03) .
- 郭萬青「《原本玉篇残巻》引《國語》例辨正」『学灯』国家図書館 2009 (02) .
- 胡吉宣『玉篇校釋』上海古籍出版社 1989.
- 胡吉宣「《玉篇》引書考異」『語言文字研究專輯』上『中華文史論叢』增刊 上海古籍出版社 1982.
- 胡智雄「原本《玉篇》残巻引《礼記》管窺」『安徽文学』安徽省文聯 2017 (11) .
- 李慶彬「原本《玉篇》引《尚書》考論」『歷史文献研究』中国歴史文献研究会 2019 (01) .
- 李媛「篆隸万象名義の本文データベースの構築 —玉篇残巻対応部分を中心にして」『国語国文研究』146、2015.
- 劉杰陽「原本《玉篇》引《尚書》傳本性質試析」『古典文献研究』南京大学古典文献研究所 2021 (03) .
- 劉新楠「原本《玉篇》引書字詞異文價值举隅」『忻州師範学院学報』2021 (04) .
- 呂浩『玉篇文獻考述』上海人民出版社 (2018) .
- 徐前師「唐写本《玉篇》中的《字書》」『湖南科技大学学報』2007 (04) .
- 蘇芃「試論《原本玉篇残巻》引書材料的文献学價值：以引《左氏伝》為例」『図書館雑誌』上海図書館 2006 (12) .
- 蘇芃「原本《玉篇》引《史記》及関連古注材料考論：裴駰《史記集解》南朝梁代傳本之發現」『文史哲』山東大学 2011 (06) .
- 蘇芃「《玉篇》残巻征引『儀礼』考」『古籍整理研究学刊』東北師範大学文学院古籍整理研究所 2017

(05) .

蘇芑「南朝蕭梁時期《春秋公羊傳》經注文本探微：以原本《玉篇》引書爲例」『歷史文獻研究』
中国歴史文獻研究会 2018 (01) .

姚永銘『原本玉篇殘卷校証』浙江古籍出版社 2023.

臧克和『中古漢字流變』華東師範大學出版社 2008.

朱葆華「原本《玉篇》引《說文》考略(一)」『中文自學指導』全國高等教育自學考試指導委員會
1998 (02) .

TEI P5:Guidelines for Electronic Text: <https://tei-c.org/release/doc/tei-p5-doc/en/Guidelines.pdf> (accessed 2025.11.12)

TEI 協會東アジア／日本語分科会: <https://tei-c.org/activities/sig/eastasian/>(accessed 2025.12.23)

附記：本稿は、JSPS 科研費（課題番号：21K18013）による成果の一部である。